

エネルギーを 学ぶ・伝える・考える



岡田新浜で、さまざまな海浜植物を熱心に観察する児童たち

人と人との絆を深める ハマヒルガオプロジェクト

東日本大震災による大津波で、未曾有の被害を受けた仙台市沿岸部の岡田地区。以前は植物が豊かに生息していた岡田新浜の海岸も壊滅的なダメージを受けました。3カ月後、驚いたことに、津波で流された木々が折り重なる中で、海浜植物が力強く花を咲かせました。しかし、その後の防潮堤建設工事などにより、息を吹き返した海浜植物は幾度となく危機にひんします。震災から3年後、岡田新浜を再び花咲く海辺にしようとする地域住民や専門家が立ち上がり、海浜植物の再生・復興を目指した活動が始まりました。

岡田新浜から約3kmの場所に位置する仙台市立岡田小学校は、この取り組みに2016年から参加。ハマヒルガオをはじめとした海浜植物の保護・環境再生活動は「ハマヒルガオプロジェクト」と名付けられ、この活動を通じて児童たちは先生方が驚くほどの成長を見せています。

中心となって取り組むのは、熊谷敬子校長先生（取材当時）と高野祐一先生です。ハマヒルガオプロジェクトは、多くの人々に支えられて9年目を迎えました。

訪れた場所

仙台市立岡田小学校

宮城県仙台市宮城野区岡田字北在家67



先輩たちから引き継がれる 海浜植物の知識

プロジェクトは、1年間で4回の活動があり、4年生から参加します。講師は、平吹先生、鈴木代表の他、地元の種苗専門家が務めます。高野先生は6年前に5年生の担任を務めた際、プロジェクトに初めて携わることになりました。「最初は海浜植物の名前すら分からず、子どもたちから花の種類を教えてもらうなど、分からないことがたくさんありました。今、自分自身がいかにプロジェクトにのめり込むようになると思いませんでした」と、高野先生は当時を振り返ります。校長として着任した熊谷先生も、児童たちが生き生きと取り組む様子に、「なんて素晴らしい活動なんだろう」と思ったそうです。

プロジェクトは毎年11月にスタート。4・5年生が学校の育苗箱に種まきを行います。この種は翌年6月の育苗ポットへの植え替え、10月の植栽を経て、翌々年の5月頃に開花します。種をまく海浜植物は、ハマヒルガオの他に、ハマナス、ハマエンドウ、ウランなど10種類。児童たちは、種まきの前に講師の方から説明を聞きますが、その表情は、真剣そのもの。このプロジェクトが特別なものであることが伺えます。

震災でダメージを負った 海浜植物の保護からスタート

岡田小学校がハマヒルガオプロジェクトに参加するきっかけとなったのは、仙台市の東北学院大学で主に生態学を研究される平吹喜彦先生、そして北海道に拠点を置き、鈴木玲氏が代表を務める団体「北の里浜花のかけはしネットワーク」との出会いがありました。平吹先生たちは、津波で何もかも流され壊滅したように見えた海岸で力強く自生する海浜植物の姿に驚き、その生命を大切にしながら復興に携わりたいという想いで、被災海岸で生き残った植物から種子を採取し、その後北海道で苗を育て、再び東北の海岸に移植するプロジェクトを2013年に開始しました。

この取り組みを知った当時の高砂市民センター館長は、岡田小学校の佐藤正文校長のもとを訪れます。地域住民とともに、地域の未来を担う子どもたちにも岡田新浜の再生・復興活動に協力してもらいたい、そんな館長の熱い想いに共感した佐藤先生は、専門家の力を借りて、2016年、「ハマヒルガオプロジェクト」をスタートさせました。



▲岡田新浜に咲くハマヒルガオ。5～6月頃に、直径4～5cm程度の薄紅色の可憐な花を咲かせます



▲(左)ウラン、(中)ハマエンドウ、(右)ハマナス



▲お話を伺った熊谷敬子校長先生(右上)と高野祐一先生(左下)。熊谷先生は2021年から同校に就任



6

- 10月に行う植栽の様子。自由に選んだ苗を、割り振られたエリアに植えていきます
- 植栽の後はごみ拾いを行うことで、児童たちの心には自然と環境への意識が芽生えています
- 仙台市営地下鉄東西線荒井駅の構内にある「せんだい3.11メモリアル交流館」では、児童が作成した資料やDVDを展示しました(2021~2023年度で2回展示)



5



4



3



2



1

- 卒業生が作成した「海辺の植物図鑑」。10種類の海浜植物の特徴や観察のポイントが書かれています
- 種まきの前、発芽しやすいように余分な部分を取り除いたり、紙やすりで削ったりして準備をします
- 昨年度の観察会は雨のため、講師の先生方に質問する時間をとりました。質問は1時間半も続き、先生方や児童たちにとって充実した時間となりました

下級生に受け継がれる様子に 先生方も感動

翌年の5月。5・6年生に進級した児童たちが、実際に岡田新浜へ足を運び、先輩たちが植えた海浜植物の観察会を行います。美しいピンク色のハマヒルガオの花が一面に咲いている様子に驚いた児童が「震災の影響で自然が奪われたのに、こんなにきれいに咲いている。奇跡の花だと思った」と津波で受けた地域の被害に思いを寄せて話していたそうです。

観察会では、事前に学習した10種類の海浜植物を探します。ここでも児童たちは、「この花は堤防の傍に咲いているね」「この植物は波打ち際の近くまで続いているよ」など、たくさんの発見に目を輝かせます。先輩の6年生が、5年生に花の名前を丁寧に教える姿を見て、「受け継がれるってこういうことなんだと思いました。大切なことですね」と高野先生は嬉しそうに目を細めながら話します。

そして6月。前年11月に植えた育苗箱の苗が少しずつ発芽を始めていることを確認し、育苗ポットに植え替えを行います。2023年度は、なんと552株もの苗を植え替えることができました。

プロジェクトを通して 成長する児童たち

高野先生がハマヒルガオプロジェクトに携わって2年目、気がかりなことがありました。種まき後、ハマヒルガオの種がいつかうに発芽しないのです。講師の先生に相談すると、外側の皮が固いことから、十分な水を吸わないことが原因で発芽しにくいとの説明を受けました。そこで、高野先生は翌年の種まきで「紙やすり」を使い種の表面を削るアイデアを取り入れました。直径約5mm程度の小さな種を一生懸命に削る児童たちに、先生は質問を投げかけます。

「どうして紙やすりで削ると思う？」すると、児童たちは「そうか！海には砂があつて、自然に削られるから発芽するんだ」でも、ここには砂がないから、私たちが削らないとだめなんだね」と、自ら気付き始めたのです。高野先生は「子どもたちの成長に本当に驚きました。ハマヒルガオプロジェクトは花咲く美しい海辺を取り戻すという目的だけでなく、身近な自然や地域の環境などについて、自ら考える力を育ててくれます」と語ります。

植栽のときに役立つ 観察会での気付き

最終工程の10月は、育苗ポットで十分に育った苗をいよいよ海岸に植栽。一人につき11株の苗を、割り振られた1㎡のエリアの中に自由に植えます。中には、観察会で気付いたそれぞれの植物の特徴を考えて、「背丈が高くなる植物を風除けにしよう」「これは生存競争に弱いから、他の植物と離して植えよう」など、植える場所を真剣に考える様子も見られました。

植栽の後は、次の活動に向けて種を集めます。集める種は10種類ですが、海岸にはそれ以上の数の海浜植物や外来植物があり、見分けるのはとても困難です。先輩たちが作成した海浜植物の図鑑(上記写真1)を手に、種や葉のかたちを参考にしながら、海岸を探し回る児童たち。これまで植栽された海浜植物などから一生懸命に10種類の種を採取。

そして最後に、海岸のごみ拾いを行い、すべての工程が完了です。岡田小学校では何年にも渡りこのサイクルを繰り返し、次の学年へとバトンをつなげてきました。

活動の場が広がり モチベーションが高まる

ハマヒルガオプロジェクトが始まって以降、歴代の児童たちは海浜植物の知識を深め、10種類の海浜植物の特徴や観察のポイントを記した図鑑やスライドなどを作成してきました。「これからもこの活動をずっと続けていけますように」との先輩たちの想いが詰まった数々の資料は、「岡田小学校の財産」として、今後も大切に役立てられています。

2016年から大切に紡いできたハマヒルガオプロジェクトは、今では報道機関に注目されるようになり、一方で活動を紹介する企画展や発表の機会も増えています。

東日本大震災の伝承施設「せんだい3.11メモリアル交流館」では、児童が制作した活動に関する壁新聞や海浜植物を描いた作品を展示(上記写真6)。また、2022年度に開催された「第68回仙台市児童・生徒理科作品展 小学校の部」では、海岸のごみ拾いに関心を持った児童の作品「岡田の海のマイクロプラスチックの研究」が審査員特別賞を受賞。児童たちは、自分たちの活動に誇りを持ち、活動の場が広がっていくことにモチベーションを高めています。

これまでの取り組みから 数々の賞を受賞

震災から13年。今、小学校には震災前に生まれた児童はいません。そして、仙台市内で一番海に近い岡田小学校では、多くの家庭が家屋の流出・全壊という被害を受けたことで、保護者が海に警戒心を持ち、海に親しみを感じていない児童もいました。

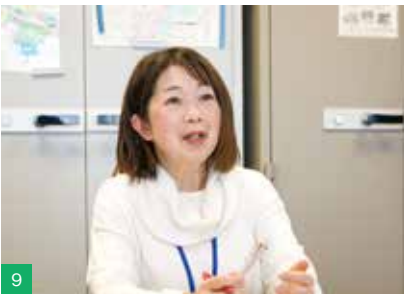
「それでもこのプロジェクトを通して、海辺がふるさと」という思いがすこしずつ芽生えていると感じます。ふるさとの花咲く海辺を守りながら震災を忘れない気持ちをお大切にしてほしいと思います」と熊谷先生。高野先生も「2年前、児童が『地域の人にとって、ハマヒルガオプロジェクトが復興のシンボルになればいい』と話したこと、とても感動しました。今は企業や町内会など、多くの方々にご協力いただいています。この活動が、人と人とのつながりで成り立っていることも学んでほしいですね」と話します。「絆」という花言葉を持つハマヒルガオの可憐な花が、児童たちの環境問題への想いを深め、力強く成長させようとしています。

熊谷校長先生の プロジェクトへの想い

自然と触れ合い、生態系や環境問題についての理解を深めるとともに、住民との交流が地域への愛着も育んでいる「ハマヒルガオプロジェクト」。環境教育の目標を「自分たちの身近な自然や地域環境、生活について考えたり、関わったりできるようにする」としています。児童に「自然の美しさや強さ、大切さなどを感じ取らせるとともに、震災復興、防災、まちづくりの観点からも地域への関心を高めるために行っています。」

今年卒業する児童が「初めて浜辺に行った時、きれいな海浜植物が一面に咲いていて、とても驚きました。その後の講義で講師の先生からの話を聞き、私は海浜植物の生態にとっても興味を持ちました。そして、後輩たちにも、そのすばらしさを伝えていきたいと考えました。また、多くの人に支えられて活動に取り組むことができています。そついった方々への感謝の気持ちも、後輩たちに伝えていきます」と話してくれました。

このように環境への思い、支えてくれる方々への感謝が児童から児童へとつながるバトンのようです。これからも児童たちの活動が、地域を元気にしてくれることを願っています。



7. 実際に児童が採取した海浜植物の種
8. 児童たちが植えた育苗箱。植栽まで、環境委員会を中心に水やりをします
9. 地域の登校見守りボランティアの方々にも毎朝あいさつをして回る熊谷先生。こういった行動の積み重ねが、地域とのつながりを強固にしています

